

兵庫県
多可町

歴史街道

加美区版

あまんじゅこの
歴史街道
がらつとある記

青垣イターチンジ

- (A) 都への道
- (B) 武士(もののふ)の道
- (C) 夢の跡道
- (D) 銀山への道
- (E) 神々への道

『あまんじゅこ』とは、「播磨国風土記」でてくる大男。空が今よりも低かった頃、ひとまたぎで3里歩き天にも届く大男は、腰をかがめなければ歩けなかった。明石のある里から北国へ行く途中、多可町のあたりに来たとき急に空が高くなり背伸びをすることができた。喜んだ『あまんじゅこ』は「ここは空が高い、たかじや、たかじや。」と叫んだ。それが『多可郡』の語源となったといわれている。ほかにも塔の石や巨大架け橋、奥中の長石などいろいろな伝説がこの多可町に残っている。

0 500 1000



A: 都への道

古くから和紙の生産が盛んであった当地は、多賀郡帽原庄（たかのごおりすぎはらのしょう）と呼ばれており、平安・鎌倉の昔から都の貴族 藤原氏の荘園でした。

鎌倉・室町時代には『杉原』と呼ばれ、中央においても名がとどろいていた①『杉原紙』（すぎはらがみ）は、清水坂（きよみずざか）を越えて人々の手により都へ運ばれていたと考えられます。

この一帯の奥深い谷からこんこんと湧き出る冷たい水と、雪が舞う厳しい気候風土が、天下の名紙『杉原紙』を育んできました。今も昔ながらの技法で灑き続けられている杉原紙研究所があります。

同研究所の向かい側には、天目一箇神（あまのまひとつのみこと）を祀る②青玉神社（あおたまじんじゃ）があります。

樹齢700年～1000年の杉巨木7本が本殿を取り囲んでいます。そのうち最も巨大な杉は、地上8尺の幹の途中から2つに分かれて天に伸びており、『夫婦杉』と呼ばれ夫婦円満と縁結びのご利益が信じられています。

高い山々の木々の間を渡ってくる風に、悠久の時の流れを感じることができます。今も毎夏、古式ゆかしい湯立てまつりが執り行われています。

また、清水坂のふもとに臨済宗妙心寺派の禅寺③雲門寺（うんもんじ）があります。門前に広がる清水集落は、アララギ派歌人 山口茂吉の生誕の地でもあり16歳まで過ごしたところです。

“丹波路の氷上へ越ゆる峠みゆ萱野はいまだ枯れ色にして”という④彼の歌碑が、清水坂を見上げる場所に建てられています。

国道を西側に入ると、応永8年（1401年）、仏徳大通禪師が祭祀されたと伝えられる⑤奥山地蔵（おくやまじぞう）があります。

また、いぼ薬師も祀られ、今でも多くの参詣者があります。

B: 武士(もののふ)の道

市原峠から箸荷（はせがい）の大見坂（おおみざか）を越える道は、丹波（たんば）へ通じる大切な道であったと思われます。

赤松氏と山名氏の勢力争いに揺れ動いた時代を経て、天正の兵乱の時代へと移る中、戦乱の世の常として、この道の人々の往来を知ることは大切な情報源であったと思われます。

当時、有力者であった杉原兵太夫安久（すぎはらひょうだゆうやすひさ）は、門村（かどむら）に構居を構え森内山の山頂に詰め城『笛草城（ふえくさじょう）』を築いたと伝えられています。

この位置は、旧杉原谷の入り口に当たり、北が一望に見渡せる場所です。

今も三重の土壘や堀の跡が残されており、この構居の南側には城主の菩提寺とされる⑥淨居寺（じょうごじ）があります。

その下の国道沿いに、⑦杉原兵太夫安久の供養塔とその由来碑が建てられています。

この辺りには、初夏から初秋にかけて⑧梅花藻（ぱいかも）が無数に咲き乱れる水路があり、水の美しさは遙か昔から人々によって守り続けられています。ここから北上し国道を東に入ると、文殊菩薩が安置されている⑨文殊堂（もんじゅどう）があります。

毎年1月には、多くの受験生が参拝し合格を祈願します。

C: 夢の跡道

天正3年（1575年）に、別所重棟・荻野（赤井）直正・藤本秀清らが、荒田城（あらたじょう）の在田（有田）氏を攻めたという荒田城合戦が伝えられていますが、この荒田城が段ノ城（だんのじょう）のことと思われています。

妙見山の尾根上に築かれ段ノ城主とされる在田源八郎朝勝（ありたげんぱちろうあさかつ）は、城に火を放ち従者とともに山を北に下り熊野部（くまのべ）の南方へと逃れました。合戦の常として逃走の際、特定の経路を集団で逃れることはしませんでした。

深手を負った勇士達は、的場（まとば）から奥荒田（おくあらた）へ逃れた者と、多田（ただ）の坂を越えて奥荒田への道を辿った者の二手に分かれ奥荒田で合流し、自刃し果てたと伝えられています。

その際、熊野部の人々は傷ついた兵士をかくまい、そのうちの何人かは同地に住み着いたというエピソードが語り継がれています。

奥荒田の⑩若宮神社（わかみやじんじゃ）は、在田源八郎朝勝の鎮魂のため建てられたものと伝えられています。

また、この経路沿いには、播磨二宮と呼ばれる⑪荒田神社（あらたじんじゃ）があります。この神社は、征夷大将軍 坂上田村麻呂が崇敬し、本殿・社領を寄進のうえ、御旅所（参拝行列）によってその念を後世にまで伝えさせたと言われています。

また、熊野部には、国道から西に入る細い道があり、その脇に真言宗の古刹⑫阿弥陀寺（あみだじ）があります。同寺には『応永11年（1404年）長満寺』の銘文が刻まれた鰐口が保管されています。

この道を歩くと、室町・安土桃山時代の戦いの跡が偲ばれます。

D: 銀山への道

多可郡（たかぐん）にも、天文11年（1542年）頃、本格的に採坑したと伝えられる生野銀山・銅山に連なる鉱脈が存在し、その採掘を産業として、鉱山関係の人・物資が多田峠や高坂峠（たかさかとうげ）を越えて生野方面に往来していたと考えられます。

この峠の途中に、当時、落葉の清水と呼ばれた⑬松力井の水（まつがいのみず）、⑭新松力井の水（平成の名水百選に選定）が湧き出ています。

また、生野代官所の支配下にあった頃、厳しい年貢の取り立てに泣く百姓の窮状を見かねた熊野部村の庄屋 夏梅太郎右衛門（なつうめたろうえもん）は、減税の願いを再三再四、代官所へ訴えました。

彼の命と引き換えに願いは聞き入れられ、この地で処刑されてしましました。処刑された場所には⑮終焉之地碑（しゅうえんのちひ）が建てられており、当時を偲ぶことができます。

この他にも、標高440メートルの地に山伏・修験者の修行道場として有名な⑯金蔵山金蔵寺（かなくらさんこんぞうじ）があります。

天平2年（730年）、行基菩薩が開基したと伝えられる真言宗古刹の同寺には、奈良時代中頃の阿弥陀如来座像など県指定の文化財があります。

また、鳥帽子山のふもとに⑰溢禦塚（いつぎょづか）があります。

昔、杉原川はたびたび氾濫し、洪水のたびに田畠が流失、人命を落とす災害が繰り返されていたそうです。これを防ごうと、安楽田村の清水権兵衛（しみずごんべえ）の肝入りで水路をつくり、杉原川の氾濫からこの土地を守ったと伝えられています。

このことを称え「あふれる水を制す」の意味を込めた碑が、弘化3年（1846年）に建てされました。

E: 神々への道

杉原川の支流多田川をさかのぼると、東播磨最高峰の千ヶ峰（せんがみね）（1005.2メートル）のふもとに、標高300メートル～400メートルに位置する小さな集落があります。

高い山々に囲まれ奥まったこの集落は、古くに築かれた石垣がそのまま残る⑱美しい棚田（たなだ）（日本の棚田百選に選定）と、『七不思議伝説』を大切に守り続けてきました。

遠く神仏未分化の頃から、この地は「神おわす山」との山岳信仰により「磐座神（いわすわりがみ）」と呼ばれていたことから、後に「岩座神（いさりがみ）」と呼ばれるようになったと言われています。

集落のはずれの高台には白雉年間（605年～654年）に法道仙人が開いたとされる⑲神光寺（じんこうじ）がひっそりとした佇まいを見せています。

本尊は十一面觀世音菩薩で、寺から少し離れた棚田の中に山門があり、鎌倉中期から後期につくられた金剛力士像が安置されています。

今は住職の居ないお寺ですが、はるか昔、この辺り一帯は持越墓として、加古川・高砂・加東辺りから遺体を運んでいたと伝えられており、かつては参詣者が絶えなかったそうです。

この辺りに佇むと、吹き渡る風の音と小鳥のさえずりしか聞こえない静寂の世界を味わうことができます。